

「倫理社会」の学習指導の実践的研究

中 尾 正 三

I まえがき

これは36年度から継続して来た高校倫理の実践研究の第三報告である。第一、第二報告はそれぞれ本校研究紀要第7集および第8集に発表してある。本報告はそれらを基盤として、今までに明らかにしてきた成果をふまえたもので、本報告で簡単にしかふれてないものについてくわしく検討されたい方は前二者をみられたい。なお実践の対象としての生徒は抽せん入学によるきわめて普通の高校生である。決して優秀とはいえない。いわゆる「エリート」でないということは、特に倫理の学習について重要な意味をもつといってよいと考える。

II 基本的視点

今年始めに当って、それまでの実践によって次のような視点と課題とを持っていた。

イ. 倫理指導上の問題点

- a. 生徒の現実
 1. 基礎的教養の欠如
 2. 抽象的思考の未熟
 3. 小市民的思考態度——(ささやかな小市民的幸福を求め、社会との関連の中で主体的に考えようとする態度が稀薄である。)
- b. 教科書の問題点
 1. 内容の量と質——(量的に余り多すぎても困るが、質的に偏っていたり重要なものが欠けていても困る。)
 2. 表現——(抽象的で感動性がうすい。)

ロ. 方法上の留意点

1. 身近な問題から——

生徒たちの現実的問題や悩みをとりあげ、話し合いながらそれに知的な裏付けを与えてゆくこと。そこから共感と解放感と洞察とが生まれてくる。このことは導入段階としての「青年期」や「人間論」においては特に重要である。関心と興味を高め、人生観・世界観の思想的学習に入ってゆく為にも。

2. 現代日本の生き方に焦点をしぼって

倫社の多量で雑多な内容を一貫し、かつそれぞれの位置づけをなす中軸は「現代日本の社会の中で如何に生きるか」という課題であると考え。この観点から「量と質」の問題も処理されるべきである。また小市民的思考とプラグマチズム、社会主義と実存主義、アジアの伝統的思想と現実、ナショナリズム、それに宗教の問題などは重要なものとしてとりあげたい。

3. 一般化された抽象的思考の形成

抽象的概念は思考の重要な道具であり、それによって個々の具体的問題を一般化し、より高い次元での思考と解決が可能になる。生徒たちはそれぞれ人生や社会に対する感じや無意識の態度を持っている。それを意識化させ、人生感を人生観にまで高めてゆくことが必要である。

ハ. 残されていた課題

1. 系統学習と問題学習

上述のねらいを実現するために、特に倫理思想の学習方法として系統学習と問題別学習とのどちらがよいのか。比較研究してそれぞれの長短をたしかめたい。私は仮説としては、最初に系統学習を行なって基礎知識と歴史的理解を持った上で、問題学習に入って自分自身の考えを整理しまとめる方法がよりよいのではないかという考えをもっていた。

2. 倫理学習開始の時期——1年か2年か

倫理の学習は普通2年ということになっており、また学校によっては3年にもっていつてるところもあるようである。しかし、それまでの実践の結果から、やり方によっては1年からもやれるし、むしろ1年からやる必要があるのではないかという感じが強かった。というのは、高1という学年が本校の中1から高3までの中でもっとも「問題的」学年であったからである。青年期特有の悩みのピークが高1の時期で、高2になるとほぼ落ちつくという現象がみられる。(本校研究紀要第5集、第6集、第7集の生徒指導についての論稿参照)。その高1の時期こそとくに青年期の心理や精神衛生についての知識を与える必要があるはしないか。それがこれまでの倫理の指導や生徒指導、カウ

セリングの経験から得た一つの仮説であった。

3. 新しい教科書への期待

それまでの指導の試みでもっとも困ったのはよい資料が教師にも生徒にも無いことであった。それで特に重要でありながら不足していると思われる人間性の理解、東洋の日本思想、また導入としての人生論などの資料集を自分で作ってみた。38年度は新教科書の見本もできるし、その解決にも幾分の見透しがつくのではないかという期待をもっていた。それと同時にまた一体どういう教科書が出来てくるかという関心も強かった。

4. 評価とテストのあり方

倫社で評価すべきかどうか——。最初の頃は倫理想を評価することはできないかと考えたが、やがて教育的意味から、評価はすべきであるが、いわゆる「テスト」はできないと考えるようになった。しかしテストをおこなわないと、生徒が倫理の学習を軽く考えてしまっただけで楽しい時間とのみとして、或いは怠けてよい学課として、うけとってしまう結果になった。これをどう解決するか、が昨年残された宿題であった。

5. 知的認識と主体的実践的態度の背離

6. 倫理想の相対性と究極の規準

この二つは解くことの困難な問題かも知れないが、少なくとも教科としての倫社が果たしうることを位置づけておかねば、不必要な混乱をおこしやすい。倫社学習に対する不当な期待や、逆に又知的「読教科書」的授業におちいり、教師自身が苦しんだり、期待外れでがっかりしたりすることになる。この問題をもう少しはっきりさせたい願いがあった。

III 実施の過程 (38年度の実践)

イ. 倫理想学習の三コースの設定

以上の観点から、最初の導入部としての「人間性の理解」は三コースとも「話し合い→青年心理・人間の行動機制についての知的学習」を行ない、続く倫理想の学習を次の三コースに分けて実施してみた。

④ 系統的思想史の学習——2年1学級53名

現行社会科社会教科書の思想史部分を中心に要綱をプリントとして渡し、また資料集として市販「社会資料集」をも利用させるが、主として教師の講義を中心として進み、教科書・資料集は自分で読ませる。時折、感想をのべあう。

⑤ 問題別学習——2年1学級53名

④のクラスと同じ教科書・資料集を各自で利用させ、授業中は「話し合い→その整理→まとめられた要点についての先哲の思想の学習」という方法ですすめ

る。取りあげた問題は、文部省の導指要領と16社中唯一つ問題別編集を行なったT社の教科書を参考にし、更に生徒たちとの話し合いや調査にもとづいて、「幸福論・自由論・人間論・人格論・社会論・絶望と希望・正義と愛・善と悪・理想の人間像」の九つのテーマを選んだ。また話し合いは、発言が一部に限られやすい全体討議より、全部の者が話し合いできるバス討議法をとった。

◎〔知的系統→問題別〕学習(高1・2学級104名)

1年から2年間週1時間で実施することにし、39年度採用の教科書(系統史的編集)を関係機関の了承を得て11月から使用することができた。それまでは人生論的話し合い、朗読、テープ録音(NHK青年期の探究など)の聴取などを行ない、教科書が来てからは教科書中心の系統的学習を行なった。思想史の知的理解を得た後2年になってから問題別に再整理してゆく計画であった。

ロ. 課題読書

三コースとも学習以外に次の書を指定し、その中一つ以上を選んで読ませてレポートを提出させた。

2年—論語・聖書・歎異抄・正法眼蔵随聞記

1年—ヒルティ、ラッセル、アランの「幸福論」

文庫本で廉価で入手しやすいこともあり、図書室にも複本として備えた。

ハ. 12月(2学期末)ま所の進捗

④—西洋思想現代まで全部終了

⑤—「社会論」まで

◎—古代ギリシア、キリスト教の初めまで

IV 結果の分析

イ. 系統学習④と問題別学習⑤との比較

「学習の効果があがった」 ④ 72% ⑤ 64%

「どのような部分に感銘したか」

④ 52%—思想の学習の中で

⑤ 55%—話し合い

一応それぞれの学習について効果や感銘はあったと考えてよいであろうが、授業についての満足感は後出第2表にみられるように④は⑤の2倍である。しかしこれだけの数字から早急な判断を下すことはさけて、更にくわしく質的な分析を試みてみよう。以下生徒の^{なま}生のことばを借りて叙述を進める。(◎○□△×は筆者の適宜な分類である。)

④の場合の効果と満足している点

○やはり誰もが自分と同じような経験や悩みをもっていることがわかった。

- 僕とちょうど合う。それにこれからのことについていろいろと参考になるから。
- 青年心理が分り対人関係に役立った。
- 劣等感や不安は誰にでもあると思った。
- 歴史に伴なう思想がわかった。
- 古代から現代までの思想を追い、それが自分のためによかった。
- 色々な考え方やその発展がわかってきた。
- 思想に関して殆んど無知であったが、多少なりともそれを知ることができた。
- 現在の私たちの考え方がどんな風にして出来上ったかが分った。
- 今まで思っていたことといささかちがったことを教えられたので少しは考え方がちがってきた。
- 今まで知らなかった人間の思想の歴史が分った。人生とか人間の難しさを感じる事が出来た。
- 自分の思想をはっきりしたような気がする。
- 気持がうる。軽石みたいなものが重く密になる気持。言いあらわすことはできない。なぜなら、すぐ効果が現われるのでなく、為になるというのはもっと後のことなのだから。
- 今まで知らなかった「人間」、いろいろな面においての人間がわかってくる。今までは何でもなかったことなどもおやと思うし、それだけ何だか教養がそなわってきたような優越も得ることができた。私の好きな教科の一つといえよう。
- △重点がよく理解できる。
- △大きな流れを知るのに良い。
- △自分たちが知らないことばかり出てくるので、やはり自分たち同志でやるよりは十分に満足する知識がえられると思った。やはり知ることが必要。
- ④の場合の不満点
- △各時代の中心的存在である思想家についてくわしく講義してもらいたい。
- △もっと思想を具体的に講義してもらいたい。
- ×受身的なところがいや。
- ×講義を聞くのみでどうしても終わってしまうから。
- ×もっとみんなの意見が聞きたい。
- ×授業だけで話し合いの機会が少ない。
- ×一学期の初め頃はみんなで考えたりするテーマが多かったせいか頭に印象づけられています、思想史になってから自分で考える機会が少なくなったように感じます。現在習っていることが直接には自分の生活と結びつきがうすいからかも知れません。
- ×授業は、今我々の悩みを解決することであると思う。それには先人のすぐれた思想を分りやすく説明することはもちろん、我々自身の思想を作り出すためにいろいろ話し合うことだと思う。
- ×もっと時間が欲しい。そうすればまず先生に系統的に教えてもらって、それが全部すんでから、個人又はグループで問題別に勉強することができるのですが……。
- ×1学期勉強した時のように自分で考えることが少なくなったように思います。あの頃は時間中でも考え、今まで自分に足りなかった考え方をみつけて喜んでいたので、今は先生のお話を伺っているだけの状態です。
- ×思想の変化・発展というか推移については問題なく今の

ままの方法の方がいいに決っている。しかし思想そのものを知る上ではB組の方法が適切かも知れない。なぜならAの方法はあくまでも受動的であるためだ。

⑤の場合の効果と満足感

- 他の人の考え方が分ってよかった。
- 自分の考えが自由にのべられる。
- ふだんめったに話をしない人と話し合えてよかった。
- 資料を多く使うから広い範囲を調べる。
- 受身的で授業を受けていたものがある程度積極的になった。
- 今までおぼろげであったことを話すことによって考えがまとまってきた。
- みんなの考え方がわかって、自分の考えを客観的に見ることが出来た。
- 考え方はそれぞれ違いますが根本は同じであるということがはっきりとわかるように思えます。
- ふだんあたり前だと思っていたことをより深く知ることが出来、その出てきた理由も分り、改めてそのものに対する見方が違って来たような気がします。
- 諸問題に対する古代以来の解答は千差万別で、それが自分の考えをはっきりさせるのに役立った場合もあるし、自分の考えを是正するのに役立った場合もある。昔の人の考えたことが今も通用するという事は、たとえ数々の社会変化があってもその根本は変わらないことを証明している。
- 現在の私たちが悩み考えることは昔も今も変わらないことを知って驚いた。又その考える内容も私たちと同じ、いやそれ以上に洗練されており学ぶべき点が多いのに感激した。
- 倫理を学び始めてから、私はむやみに分らないことを口にしないようになり、そういうものの本質を知りたいと思うようになった。
- 現在の問題を多く含んでいる為、現在の生活状況を考え直す機会を与えられたことになるので生活向上に役立つ。
- 殆んど問題は結論的なものは出なかった。自分で考えてみたがやはり結論は出なかったが、私はこれでよいのだと思う。大人になってからこれら諸問題について一つ一つ結論的なものが出てくるだろう。今は色々なことを知り考えて、これらの進路に役立てることが大切であるから。
- 自分の心の整理もできたように思えるし、自分自身の考え方が広がったような気がする。
- 一人の思想でなく問題に関する人の思想が全部一度に出て来るから、その問題について多くの方向からながめることができる。
- いつも身近かにあり、また自分一人であるいは他の人々と一諸に考えている問題について、古くからの有名な人々の考えを知るといことは、その問題を再び深く考えてみる(それは以前よりもっと豊富な知識で)ということ意義があると思う。しかし、個人とか歴史への考え方はまとまりがつかない。が私はそれでも良いと思う(間違っているかも知れないが)。私達が日頃考えていることについてのすぐれた思想家の考えを知り、私達の考えがもっともっと深く掘り下げられてゆくことができればそれで良いような気がする。

□ある思想について色々な思想家をあげて討議することはその思想の奥底まで話し合える利点があると思う。

⑥の場合の不満点

- △ある程度教科書に沿って教科書の内容もやって欲しい。
- △思想家についての説明が少ない。
- △グループでの話し合いで自分勝手なことを話すか、全然しゃべらないことがある。
- ×各人の思想がその表面的なものになってしまい、うわべだけを見ているにすぎない。もっと問題を深く掘り下げたい。
- ×皆で話し合ってもある程度までしかゆかないで後はもやもやしていることが多いから、もっと講義を多くして欲しい。
- ×一人の思想家についてじっくりと考えることがない。どういう人がらで、どういう思想をもっていたのかくわしく知りたい。
- ×時代の流れ、そしてその時代の民衆の心を知りたい。
- ×年代という事を無視しているために、誰が何時代の人かと聞かれても困る。これは自分で年表を作って覚えなければならぬ。
- ×その時代その時代の考え方がつかみにくい。
- ×思想史が分らない。人が出てくるとあまり知られていない人はどの時代か見当がつかない。
- ×個々の思想家のいろいろな方面への考え方はバラバラになってしまつてまとまりがつかない。
- ×思想家がいろいろなところで出てくるのでその名前の順序や思想の移り変りと社会との関係がはっきりしません。
- ×思想の歴史的発展がつかみにくい。
- ×個々の問題について種々な思想家・哲学者が考えた内容が部分的によくわかるが、その歴史的背景はどのようなものであったか、またなぜそのような考え方が出て来たのかよくわからない。
- ×思想家を問題別グループに分けるとその人がそのような考えしか持っていないのかと思ってしまう。

④と⑥の比較検討

上にのべてきたような結果から考えると、④は知的理解においてよい結果をおさめ、かつ生徒も授業に満足している者が比較的多い。それに反し、⑥は主体的な思考においてすぐれた洞察を示す者も出る反面、相当の者が知的系統的授業を希望していることがいえよう。④で問題別の学習を希望する者29%に対し、⑥で系統的知的学習を希望する者は44%に達し、現在の授業に対し積極的に不満をもらす者は④22%、⑥27%、積極的に満足を示す者は④34%、⑥13%である。

⑥が主体的思考を高める点で④にまさるであろうことは、自分自身のまとめを必要とする論文体の記述式テストに賛成しかつ満足する者が多い(④の49%に対し⑥62%)こと、また教科書を自分でよく読みかつ理解していると思われる者が多い(④72%に対し⑥84%)ということからも推定されるであろう。

しかし④にしても⑥にしてもそれぞれ問題があり、

それをどのように解決してゆくかは今後に残された課題である。

ロ. [知的→問題別] ④コースの問題点

④⑥が2年を対象としているのに対し⑤は1年である。⑤は最初の間は④コースとほぼ同じであり、進度もゆっくりで、教科書も新指導要領による倫社教科書であり、④と同じかむしろよりよい結果をみせるのではないかと予想していたのであるが、結果は相当異なっていた。

効果あり 33% なし 45%
満足 8% 不満 38%

という状況である。これは学年差によるものと考えてよいであろうか?他の統計結果

資料が欲しい 1年 43%→2年 62%

古典が読みたい 1年 24%→2年 52%

をみると一応そういってもよいであろう。

しかし次の表をみていただきたい。

第一表 (数学は%)

効果	◎ H 1		H 2 ④		H 2 ⑥	
	男	女	男	女	男	女
+	32	④1	⑥3	⑥4	⑦4	⑥2
○	18	28	17	8	11	24
-	⑤0	31	20	8	15	24

同じ1年でも男子と女子では随分ちがう。恐らく高1の時期は女子がより精神的に早く成熟し高2の時期になるとほぼ同じに近づくと考えてよいであろう。この傾向は他の諸調査結果でも確認できることである。

しかし1年生は一体何を不満としているのであろうか?生徒の叙述を引用してみよう。

◎で満足し効果があったとする点

- いろいろと考えがあるので面白い。
- 自分の気持ちとの比較が出来る。
- 青年期の私たちが考えていることが分つて自分との比較が出来た。
- ◎いろいろな考えが分つたし、何だか人というものも理解されたような感じ。
- ◎自分の精神に対しての不安がうすれた。
- ◎幸福などに対する考え方も人によって大変違っていることがはっきり分つた。
- ◎昔から有名な思想家の考え方がよく分つた。
- ◎時代の変化と思想の変化が分つた。
- 自分で考える練習になった。
- すぐれた思想家の考えを知り、自分の考えを深めた。

◎で不満とする点

△皆はあまり分っていないということを知ってもらいた

い。歴史的に色々な出来ごとを話して欲しい。

△骨と皮ばかりの授業だ。

△先生ひとりで教科書を読んで黒板に書いてしゃべっている状態になってしまって、ゆっくり考えるひまがない。

×もっと話し合いがしたい。教科書が来る前まではとても興味があったが今は無い。

×一学期の学習の方が面白かった。二学期はただ暗記ばかりしていた。

×教科書中心にやり始めたら、何だかつまらなくなってきた。教科書がまだ来なかった時が面白かった。

×思想史は程々にして、もっと現実にある問題について話し合いたい。

×もっと身近な問題について討論したい。

×歴史的な思想、背景、系統など昔の人の考えなどより、現実的な問題(あり方、人生、悩み)などについて多くみんなと話したい。

×倫理は数学などちがって直接人生に役立つものだと思っていたが実際はそうでもない。

×生徒にもっと考えさせるように、生徒と先生との関係というより、一人の大人として我々と共に考えてゆくようにしてもらいたい。

◎の結果についての考察

以上を眺めてみると、まず第一に④のコースで出た不満が拡大されて出て来ているように思える。話し合いがしたい。もっと現実的なものを、という要求であり、受身でなく積極的に自分たちの関心を結びつけた希望がうかがえる。逆に満足感④とほぼ同じで、量的に少ないし、かつ質的にもやや劣る感じがする。しかし④にみられず◎のみにみられるものが一つある。それは、進行速度が早い、理解が困難である、もっと分かりやすい講義を、という要求である。しかし、私の感じでは、④よりも◎の方が、はるかに進行速度もおそく、かつ掘り下げてくわしくやっているし、随分かみくだいてやっているつもりである。とすると結局、抽象的思考力の発達に1年と2年との間で相当の開きがあると推定してよいのではなかろうか。1年の時は個々のいわゆる青年期の感情の諸問題に密着し、あるいはまきこまれて、距離をもった思考をする余裕をもてず、それを一般化した形で抽象的な思想に関心をもつ段階に達するのは2年にかけてなのではなかろうか。同じ1年でも男女差がはっきりみられるのも、一般的な青年心理学の教える所とも合致しているようである。

この抽象的思考—認識の発達の問題は残された大きな課題であると思うが、しかし、からといって1年は無理であり、従って1年から実施するのはよくないのだ、という結論をすぐ引き出してよいであろうか？

倫社の学習を何年から始めたらよいか、という問いに◎コースの1年生は、1年からと答えているもの55%、「2年から」—37%である。(2年になると、78%

が1年からと答えている。)1年から実施した主要な動機である青年期の悩みの一つの解決、集団的カウンセリングとして、の意味は、◎コースの1年生が感銘を残した箇所についての調査結果からも見出すことができる。すなわち、話し合い(43%)青年期の心理(24%)思想(19%)読書(14%)であり、第1分野としての「人間性の理解」についてはいちじるしく関心をもっていることがうかがえる。1学期には随分喜ばれていた倫社の学習であるか、思想史の学習に入つてつまづいてしまったのだ、といってよい。それで、やはり1年でやることは心理的領域がむしろ適当であり、かつ必要ではなかろうか、とも思われるのである。問題は1年の後半から2年にかけて、どうしたらよいか?である。私としては最初の予定では「系統→問題」の仮説を立てていたのであるが、これを「問題別」の◎コースにきりかえるか、それとも「問題→系統」の新しいコース(◎)を考えるか?更に、もっと大きく修正して、生徒たちが現実社会の問題をとりあげたいとの希望を随分持っている(特に男子)ので、心理→社会→倫理という新しいコースを考えてみるか?—(その倫理が更に④か◎か◎か◎かに分かれる。)更に今後工夫してみたい。

以上述べて来た結果を倫理思想の部分について簡単に図表化すると次頁第二表の通りになる。

ハ. 課題読書の効果

課外に与えて読ませた結果2年67%、1年38%(女子は56%)が役に立ったと報告している。すなわち

・普通ではなかなか手を出せない「幸福論」なのに読んでよかった。

・本を読んで今後の思想の参考になった。

・今まで目を向けなかった本に接して、なるほどこういう本も読むと為になると思った。

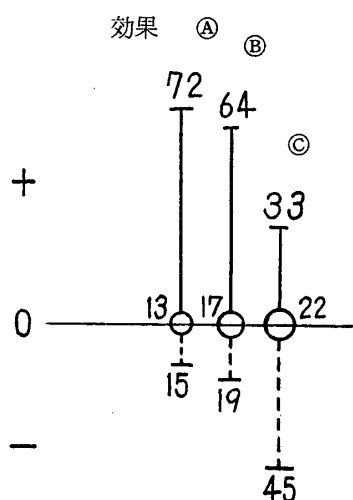
などの感想である。しかし、課題として読ませる本の選択がよほど問題であり、特に高1においてはそうであると思う。もっと文学書とか、一般化された幸福論よりも、個々の恋愛とか友情とかの具体的な問題についての本から入った方がよいのではないかと、とも思われた。今後更に検討して、読書リストを作り、学校図書館とも連絡して備えてもらう等の配慮をしたいと考えている。

ニ. 教科書使用に際しての問題

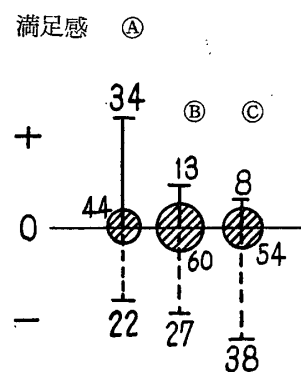
去年までの倫理思想の学習指導で最も困ったのは、いい教科書や資料がなかったことである。幸い今年初めになると、39年度からの教科書が見本として出来たので、それを参考にすることができた。教科書の

(第二表)

	㉔ 系統 (2年)	㉓ 系統 (1年)	㉒ 問題別 (2年)
+	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 知的理解 ◦ 視野の拡大 ◦ 自己の修正 ◦ 明確化 	㉔に同じ	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 他者への理解 ◦ 自己の明確化 ◦ 知識による洞察 ◦ 主体的態度
-	<ul style="list-style-type: none"> ◦ もっと具体的掘り下げを 	〃	<ul style="list-style-type: none"> ◦ うわべだけの話し合いになりやすい
	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 話し合いがしたい ◦ 受身はいや ◦ もっと現実的なものを 	〃	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 思想家や時代の流れについて、もっと明確な系統的知識を。



- 進み方が早い
- 理解が困難
- もっと分かりやすい講義を



分析批判は本稿の目的ではないので、くわしくふれられないが、結論的という、どれか一種類だけで十分であるといえるものはない。内容にしても、叙述にしても、資料や年表などにしても、今後まだ検討し修正してゆく必要がある。個々には工夫されているものもあるが、これは来年度以降現場で実際使用してみでの経験によって更によりよいものに改められていって欲しいものである。

差し当っては、より利用しやすいものをえらんで、教師が補充訂正しながらやってゆくより他はない。11月から㉓コースの1年で39年度用教科書を実験的に使用したことは前述したが、使ってみての生徒達の感想として主なものをあげると次のようである。

- ことばがむつかしい。…①
- 歴史的背景がうすい。…②
- 全体としてつかみにくい。…③
- 文章が長い。…④
- 結論的なことが書いてあるだけで、それに到ることが書かれていない。…⑤

①は私からみれば、他の教科書に比べてそれほどでもないと思われるのだが、前述の通り抽象的概念による思考になれない生徒にはそうかも知れない。しか

も、世界史を学習していない生徒達には、②や⑤ともからみあい、おまけに④ときは、③のような結果になるのも当然かも知れない。

今後の倫社の指導においては、普通では2年になっても世界史の学習速度よりも早くヨーロッパ思想史を学ぶことになりそうで、②や⑤に対する方法を考えておかねばならないであろう。

④の「文章が長い」ということは、教科書としては大事な問題である。内容についての検討は勿論最も必要であるけれども、叙述の仕方について、それが生徒の思考や読書能力の発達段階と対応しているかどうか、についての検討が必要である。そうでないと徒らに国語的読み方授業に終始するか、教師のひとりごたんな自己陶醉に終る危険性がある。

なお、教科書の叙述編集に関連して考えておきたいことは、問題別編集の教科書についてである。最初私は問題別編集の教科書について相当の期待をもっていたが、結局採用したのは系統史的編集の方であった。その理由は、問題別というのはある面からいえば、さまざまに入り組みあった複雑な思想の流れを一つの観点から切断し、関連があると思われるものを集め

てきたものである。その場合、観点も、また、関連ありの判断も、その立場によって違ふし、また、その立場が仮りに正しいとしても大人が料理してその結果を叙述したものである。生徒が自分達で問題をもって、その問題を整理してゆく過程の中で関連あるものを学びとって、一つの自分なりの判断を下すわけではない。だから問題別編集の教科書を利用する場合、結果まで出された叙述を読んで、ただそれだけの学習に終わったら、断片的で系統性のない単なる知識のダイジェストに終りはしないだろうか、という危惧があったのである。

(その危惧が当たっているかどうか、実験的にやってみていないので分からない。来年T社版問題別教科書を採用されたところで、是非やってみていただきたいものである。「話し合い→問題の発見と整理→問題別教科書」というコースと、「問題別教科書の教科書学習」というコースとの二つで。)

T社の教科書の場合、思想家の数を思いきって制限してあるのは、量に圧倒されて知識のうのみ記憶に終りかねない系統史的教科書にまさる点であるが、逆にある思想家について例えば「幸福論」についての思想家といった断片的把握にとどまって、歴史の中での複雑な人間と思想のあり方についての理解が失われはしないであろうか、という危惧もある。しかし、前述の通り⑥コースの成果と不満ともからみあわせて、今後もう少し検討したい問題である。

生徒にとっては、何といっても教科書が最も重要で、殆んど唯一のテキストだといってもよい。その意味で教科書を生徒に分かりやすい、興味をもてる、しかも正しい内容と方向をもったものとして育ててゆきたいものである。

ホ. 評価とテストのしかた

評価についてはテストをもやることを最初に宣言して学習に入った。レポートや感想や課題読書なども評価の資料にするが、テストをやることは、生徒の知的理解を正しくさせるという意味から、やはり最も重要なことである。学習した結果を単に○や×をつけさせたり、人名とことばや書名を結びつけさせたりする、いわゆる客観式テストだけでは感心できないと思われる。自分でまとめ、自分のことばで表現してみる記述体論文式テストを加えることが是非必要だと思うが、その場合採点の時の労力や主観性という点もあるので、半々位といったところが妥当ではなからうか。テストは評価の為だけでなく、「学習の過程であり、特に自分の思考の整理への媒介手段として重要な意味をもっている」といわねばならない。その点で、今後もち

と効果的なテスト問題を工夫してゆきたい。

V 残された問題

以上、実践の過程とそこからくみとることができる主要な諸問題についての考察をのべてきたが、それらをまとめながら、残された問題をも考えてみたい。

イ. 倫理学習の位置づけ

「倫社の学習でどこまでをなしうるか、できるだけはっきりさせ、性格を明確に位置づけておきたい。」というのは昨年までも課題であった。私は現在までの実践の中で、次のように考えたいと思っている。

道徳教育の要望は大きいし、又そのこと自体を否定することはできない。しかし、それを倫社の中だけでやろうとすることは禁欲的に自制してかからねば、倫社の学習自体がかえって失敗するであろう。道徳教育は教育全体の中で行なわれるべきであり、ここでの教育ということばは学校教育をもこえた意味をもっていると考へねばならない。広い意味での教育の中の、学校教育の中の、その一分野としての教科としての倫社は、やはり倫理的なものについての正しい認識と思考をなしうる主体的な態度と知識を形成するというあくまでも知的側面に重点をおかざるを得ない。道徳的行為においては知的なものより、むしろ情緒的側面が重要であることははっきりと認識して出発したいし、情緒的側面の重要性を指摘しておくことを知的学習の中でやっておかねばならないと思う。その点では39年度からの教科書の倫理想分野の取扱いにおいては、むしろ欠けるところが大きいのではないかとも思う。しかし、あくまでもそれを知的一般的側面から追求する態度はくずすことはできないであろう。

このことは問題別学習においても否定できない。「幸福」とか「人格」とかが、生徒達が最も大きな関心をもつ恋愛や友情にくらべてどれほど抽象的なものか——話し合いから入る問題別学習の場合、個々の具体的問題をどのように抽象化一般化し、概念的思考を操作できるようにするか、——困難だが、やらねばならぬことだと思う。具体的問題や恋愛論・友情論はロングタイムのホームルームで、という方向を考えてゆくべきではないだろうか。

ロ. 抽象的思考の形式過程

そのいみで、いつごろ、どのようにして、抽象的認識や思考が発展し始めるのかを、(IVでものべたように)明らかにしてゆきたいものである。

ハ. 社会的思考の育成

もう一つ問題としたいのは、「自分の個々の問題や、日常の具体的なことからを全社全体制との関連の中でとらえて認識し、思考する態度」の形成についてである。現在の状況では口の抽象的思考はできても、それを社会の中でしかも主体的に思考しようとする態度の形成は仲々困難である。とくに「政経」の学習が後になっているので——。科学的社会認識の形成過程も明らかにしてゆかねばならない問題である。

二. 主体的態度の形成

イでのべた倫社の性格づけから、ともすれば知的教材の受身的受容に偏りやすい危険が生じる。これは㊤コースや㊤コースで出されていた問題である。受身的なものを積極的に自らのものとしてゆく為に学習の指導の仕方がもっと工夫されねばならない。これについてはVIでくわしくのべたが、問題別学習と系統学習を織りまぜたような方法が工夫されないものか。これについては系統を重んじる歴史学習の中で発展させられて来た「自己展開学習」の方法も参考になりはしないかと思われる。そしてその為にも学習の手がかりとなり参考資料ともなる教科書のあり方が大きな問題となる。又、国語教科書や文学書の積極的な利用も、そのもっている感動性という点からも考えてゆかねばならないだろうし、「課題読書リスト」や「学習の手引」(生徒用)の作成も考えてみたい。

ホ. 知的系統と掘り下げ

しかし、あまり手をひろげすぎて、手段としての資料や知的素材の量に圧倒され引きずりまわされてしまっただけは何にもならない。肝心なことは、倫社の目的とする「現代に生きる人間としての倫理的思考態度」の形成であり、「その為に最低にして不可欠の知識の質と量は何であるか」、ということである。最低を強調しすぎて、正しい知識を失い、それに基づいての判断が正しい方向を見失わせるとすれば困ったことになる。結局「正しい知的系統を前提とし、それをより効果的に主体的なものとして消化させてゆく為にどのような方法がよいのか」、ということになる。私が今までのべてきたのは主としてその方法的な側面であるが、あくまでも「正しい知的系統」と「それをどこまで掘り下げるか」という問題の解決こそが主要な問題であることは言うまでもない。それこそが出発点であり、また究極の到着点でもある。その追求の過程がまた倫社の学習なのであるともいえよう。

VI む す び

以上、広範な問題をごく概略的にしかのべられなかったが、今年の実践とその結果についての報告を経る。いよいよ来年度から本格的な倫社の学習が始められる。全国の倫社担当の教師の方々のご批判と経験の交流をお願いして終りとしたい。